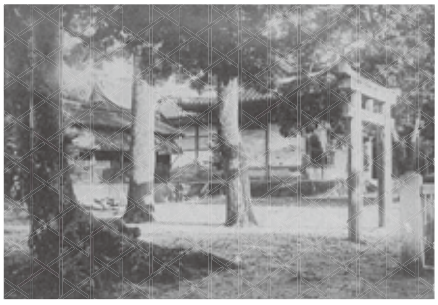
vol.298

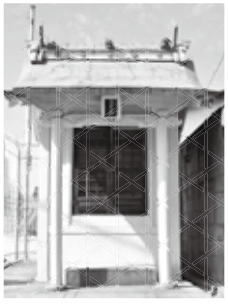
酒屋神社址に建つ「酒倉大神」

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲屯倉神社内の酒屋神社（大正4年撮影）と裏書　鳥居左側に「神形石」の石柵が見られる（屯倉神社蔵）。



▲大正4年（1915年）撮影の屯倉神社社殿（右）手前は酒屋神社の鳥居（屯倉神社蔵）。



▲酒屋神社旧地の三西児童公園内の「酒倉大神」の祠（三宅中6丁目）

▲屯倉神社に合祀された酒屋神社（三宅中4丁目・屯倉神社内）手前左が常夜燈。

延喜式内社の旧地を受け継ぐ「酒倉大神」と三西児童公園

三宅中五丁目の西方寺（融通念佛宗）の北側に三西児童公園（三宅中六丁目）があります。公園入口に祠が建てられており、正面に「酒倉大神」の扁額が掛けられています。「酒倉大神」とよばれる神名は、近代以降に付けられましたが、公園の地には、もともと明治時代後半まで酒屋神社が祀られていました。

酒屋神社は、平安時代の十世紀初めの『延喜式』神名帳とよばれる法典に記され、国家から幣帛を授けられていた由緒ある延喜式内社でした。神社の西側に酒蓋池が広がり、池の東北に酒屋井と称する井戸が存在していました。その井戸から神が出現したということで、酒屋権現ともよばれていました。

三宅には、天皇家の直轄地である依網屯倉が五～六世紀の古墳時代から置かれていたと伝えられています。屯倉とは、直轄地から収穫した稲米を蓄える倉庫があったことから付けられ、依網は、三宅や天美地域などの旧名です。屯倉神社（三宅中四丁目）の名も、同地の歴史を受け継いでいるのです。

この屯倉の地に、中臣酒屋連という豪族が住み、屯倉の米と酒屋井の水とで酒を作り、大和の朝廷に貢いでいたと言われています。中臣酒屋連氏が祖神の津速魂命を「酒屋神」として祀ったのが、酒屋神社と考えられます（「歴史ウォーク」10）。

しかし、酒屋神社は明治四十年（一九〇七）に屯倉神社に合祀され、社殿や鳥居・狛犬なども同社に移されたのでした。現在、屯倉神社本殿の横（北側）に祀られています。現社殿は、昭和六十三年（一九八八）九月に屯倉神社本殿と共に、再建されたものです。

社殿前には「式内 酒屋神社」の社号標石も見られ、鳥居の北側に置かれた「元禄四辛未年四月八日」と刻まれた江戸時代前半の元禄四年（一六九一）の常夜燈は優美な造形美を現しています。神社には、大正四年（一九一五）七月十八日に撮影された古写真が残されていました。おごそかな鎮守の杜にたたずむ風景をかもしだしています。

屯倉神社の祭神の菅原道真が、大宰府（福岡県）に左遷される折、祖先神を祀る同社に立ち寄り、休息したという「神形石」も酒屋神社の鳥居前左側に保存され、写っています。「神形石」は、今では屯倉神社本殿に至る参道左側に移されていますが、旧状を示す貴重な一枚です。

それでは、合祀後の酒屋神社旧地はどうなったかというと、旧社地のすぐ前に西芳松の家が建っていました。芳松は昭和十一年（一九三六）、七十一歳で亡くなりましたが、明治末期に近くの松田万造の長女、シゲの婿に入り、松田家の当主となりました。その際、芳松は新居を更地となっていた酒屋神社址に求めたのです。芳松は自宅を建てると共に、敷地内の南東隅に酒屋神社のいわれを受け継ぐ形で、祠を祀りました。それが、現在、三西児童公園の入口に建つ祠です。芳松は、社号を酒屋神社にならい、「酒倉大神」と名づけたのです。明治四十年代の二月十六日のことです。

のち、松田家によって創祀日の二月十六日を一年の大祭とし、それは昭和五十年代後半まで続けられたようです。

芳松や妻シゲ（昭和十三年没、七十二歳）の後、祠は長男の亀太郎（昭和三十四年没、六十二歳）と妻やえが引き継ぎました。とくに、やえは昭和五十九年（一九八四）、八十歳で亡くなるまで、大祭や日々の勤めに奉仕したのでした。

その間、亀太郎・やえ夫婦の長男である吉次（平成二十五年没、八十三歳）は、昭和四十七年（一九七二）、酒屋神社址の自宅をとりこわし、近くの地に転居しました。その後、旧地は、今のように三西児童公園に生まれ変わったのです。しかし、吉次は「酒倉大神」の祠を再建してそのまま同地に残し、吉次死後も家族によってお世話されたのです。また、吉次は同時に移転先の新築住居内の庭にも、同じく「酒倉大神」の祠を分祀し、祭祀を続けたのでした。

今では、延喜式内社の酒屋神社旧地の大神は、移転宅の祠に移されましたが、社殿だけはその由緒を形を変え、一〇〇〇年以上にもわたる歴史にいざなってくれています。